

発行：弘大病院広報委員会
(委員長：水沼英樹病院長補佐)

弘前大学医学部附属病院広報誌

〒036-8563 弘前市本町53
TEL：0172-33-5111(代表) FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

なんとう

南塘だより

第38号

(創刊：1994年12月15日)

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

「院内感染の予防を推進しよう」

弘前大学医学部
附属病院長 棟方 昭博



人類はこれまで感染症により多大の苦難を経験しています。感染症と医療との長い闘いによる医学医療の進歩や衛生水準の向上により、多くの感染症は克服されてきましたが、新たな感染症の出現や既知の感染症の再興により、感染症をめぐる状況が時代とともに変化しております。最近、AIDSの感染者が1万人を超えたとのマスコミの報道や、昨年末の院内に発生したノロウ

イルス感染など、私たち医療人は常に感染予防に気を配る必要があります。院内感染予防のために感染制御センターを設置しており、保嶋実センター長と玉澤直樹副センター長の指導の下に、院内感染対策委員会で、毎月院内でのMRSA、緑膿菌、セラチアなどの感染状況や薬剤感受性のチェックなどを行って、確実に成果を上げております。2月頃よりMRSA感染者は減少傾向にあります。しかし未だ持ち込み入院患者や新規分離患者も散発しており、油断はできません。手洗いは最も簡便で効果的な感染対策であることを、私達全医療従事者は認識すべきです。

「感染症の予防及び感染症の患者に関する法律」の第5条には、医療人の責務として「当該施設において感染症が発生又は蔓延しないように必要な措置を講ずるよう努めなければならない」

と努力目的が示されており、常に感染予防を念頭に置いた日常業務が求められます。感染制御センターでは、病院感染対策の基本を理解し、確実な知識と技術を習得し、感染防止に対する意識の高揚に努め、予防対策を実践できることを目標とし、平成17年度感染関連教育計画を立てております。既に看護師や臨床研修医を対象に、病院感染対策について研修を行っております。今後も、滅菌・消毒に関する知識の修得やカテーテル関連感染予防、職業感染に関する知識と防具の使い方などについての講習会を予定しており、職員の皆様方の積極的な参加を希望します。なお、保嶋センター長の院内での成果が全国的に評価され、今秋の11月下旬に国立大学附属病院感染対策会議が弘前大学が主管で開催される予定であり、その成果がいずれ皆様に報告されます。

診療科の紹介【麻酔科】

【麻酔科学教室の歩み】

麻酔科学教室は、1965年の発足以来現在まで40年の伝統を有する講座となりました。この間、本州最北端の地域にありながら全国の麻酔科に先駆けた業績を積み重ねてきました。その例として、開設当初からの手術部回復室での術後管理、ペインクリニック部門の開設(1966)、麻酔前診察に際した麻酔解説ビデオ供覧(1981～)、集中治療部開設(1983)とその運営、全静脈麻酔法の開発(1989)と普及、などが挙げられます。

【臨床麻酔部門】

周術期管理においては、各種合併症を有する手術患者に関して、各手術担当診療科のご協力のもとに早めの術前コンサルテーションをいただき、綿密な麻酔前計画の立案、麻酔に関する患者・家族へのインフォームドコンセントの確立に十分な時間をかけて、患者・家族の不安解消に努めております。近年盛んになりつつある日帰りまたは短期入院手術にも対応しています。

【集中治療部門】

術後患者の呼吸・循環管理や内科的疾患の急性増悪時の集中治療はもとより、各種血液浄化、急性薬物中毒・ガス中毒の集中治療などを幅広く行っています。術後に集中治療を要する患者やその家族には、術前に集中治療室の説明を行い、集学的な治療についての理解や不安の軽減に努めております。

【ペインクリニック部門】

各種疼痛疾患の診断と治療を行っていますが、この数年は悪性腫瘍患者を対象とした緩和医療へのニーズが高まっており、癌性疼痛治療を軸として、各種身体症状の緩和や全人的苦痛へのサポート・ケアに力を注いでおります。



その他、変形性脊椎症、帯状疱疹・帯状疱疹後神経痛、各種慢性疼痛、術後硬膜外鎮痛などが取り扱う内容の多くを占めています。様々な透視下の神経ブロック療法、高気圧酸素療法などの専門的な治療も数多く行っております。

【今後の展望】

全国的に麻酔科医不足は深刻で当科もその例外ではありませんが、個々のメンバーの能力と個性とを十分に発揮して、患者の安全と安心につながる良質な医療の提供を念頭に、教室一丸となって臨床・教育・研究に努力して参ります。

看護部長就任にあたって



看護部長 砂田 弘子

国立大学が法人化され、その目標を達成するために病院経営の健全化を図ることが求められています。病院の経営を成り立たせるためには一般企業と同様に、患者を惹きつける魅力ある病院作りが重要です。健全な経営を維持するためには、患者獲得は切実な問題であり、患者・家族に信頼され選ばれる病院になるためには、医療サービス

の向上が求められます。大学病院は高度先進医療を提供し治療成績の向上を図ることが、信頼され選ばれる要件になりますが、この他に職員の間関係やコミュニケーション能力やアメニティ等の医療サービスの向上も鍵となるのではないのでしょうか。

4月に認証取得したISO9001は質改善マネジメントシステムであり、顧客満足向上を目指す活動です。顧客である患者の要求や期待を理解し、その要求を満たそうと努力し継続的改善を続けることで、病院の評判が高まり、職員の職務満足が得られることでしょう。

病院職員の中で最多数を占める看護部職員は、24時間患者とともに過ごす職種として患者サービスの向上に大きく影響を与えることとなります。在

院日数の短縮や病床稼働率向上のための病床調整及び患者の高齢化と重症化で、病棟では複数の診療科が混在し、看護業務は多忙を極めております。また、診療科を越えたチームでの医療提供場面が多く発生しており、医療者間のコミュニケーションが重要になり、様々なリスクを回避するために業務の標準化を図らなければなりません。安全で安心な医療を提供するために、質改善システムを大いに活用して業務改善を促進し、顧客満足高め、職員が働きやすい職場環境を整えることに力を尽くしたいと思います。

また、大学病院は教育の場でもあり、看護師の資質の向上を図るために、良き人材育成のシステム作りを考えていきたいと思っております。

先憂後楽

新外来棟建設の槌音



広報委員会委員
(歯科口腔外科) 木村 博人

本年4月より待ちに待った新外来棟の建設工事が本格化してきました。臨床研究棟の東側の各部屋は絶え間ない工事の槌音のため、症例検討会などでの発言が聞き取り辛くなっております。最新の建築工法を間近で見られる機会も少ないのでしょうか、向かい側の病棟の窓にも絶えず見物人が見受けられる今日この頃です。

2000年7月発行の第18号の本コラムに病院長補佐として「今後5年間、本院の抱える諸課題に対して一致団結して取り組んでいきましょう」といった内容の一文を掲載しました。振り返って見ると、この間の本院職員の改革・改善に向けた努力は賞賛に値すると感じているのは小生だけでしょうか。平成15年度版の「国立大学附属病院運営改善のためのデータ集」によれば、本院の総合評価が42大学中11位と高いランクにあることは大いに誇ってよいと思えます。本院の特色は100床当たりの手術件数と医師・職員1人当たりの外来患者数が全国2位というデータに象徴されます。医師・職員1人当たりの入院診療収益も第3位と高く、棟方病院長の指摘されている通り、張り切った弓の弦のような状態にあるのかもしれない。

本学が独立行政法人となっても医育病院の使命を果たすと共に、患者さんに対しては高レベルの医療サービスを提供し続けていますが、危惧すべき点は「経営効率化」の号令の下に、医療・福祉の根源にある人間性豊かな(心優しいと言ってもよいかもしれません)患者と医療従事者あるいは医療従事者相互における日常的コミュニケーションが希薄化して行くことにあります。依然として我々の最重要課題は「リスクマネジメント」であることを念頭に、職員にとっては新外来棟建設の槌音が経営効率化への鞭のように聞こえることの無いよう、心地良い療養環境と労働環境の完成に向けた鼓動のように聞こえるよう、あと2年半頑張りたいものです。

平成16年度治験実施上位者に対する功労賞の授与について

去る3月10日(木)、治験実施上位者3名に対して、弘前大学医学部附属病院長(代理として治験管理センター運営委員長 水沼教授)から功労賞が授与された。授与式後、受託研究(治験)の今後の一層の獲得と向上のための情報交換会も行われ、活発な意見が交わされた。



〈授与者〉
医学部附属脳神経血管病態研究施設
神経統御部門 馬場正之 助教授
医学部医学科眼科学講座
大黒浩 助教授
附属病院産科婦人科
樋口毅 講師

治験とは新規医薬品開発のための臨床試験のことであるが、その進行がわが国では特に遅く海外で市販されている新薬を日本では使用できないことが問題となっている。医師にとって治験は業績にならない雑用であるため、実

施しようとする動機付けが乏しいことが背景にある。そこで積極的に取り組んで頂いた医師の貢献に対し病院として感謝の気持ちを表することとして、本年度より功労賞を創設したものである。賞の授与がすべての解決法では決していないが、小さな前進となり、更には外部資金獲得にあたってのモチベーション向上につながることを期待している。(弘前大学医学部附属病院治験管理センター長 立石智則)

ISO9001認証取得 (17.4.8取得)

管理責任者 佐々木睦男

昨年6月、日本品質保証機構によるISO9001の認証取得が附属病院の年度目標として上げられ、7月から取り組みが開始されました。この認証は、既に当院薬剤部で平成16年に取得しており、今回は定期審査を附属病院全体に拡大することであったが、拡大規模が極めて大きいことから、実質的には初めての審査と同様でありました。10余名からなるISO推進室を組織して作業を開始したものの、馴染みのない用語や概念のため、教職員の皆様も大変ご苦労されたものと思います。しかし、この作業をしていく過程で、組織の効率的な運営や機構の改革・改善がより具体的に把握できたことと思います。これまで漠然と抱えてきた「良い医療の提供」から「より良い医療の提供」へのステッ



プアップが、この機会を通じてより具体的に、より明確になったと感じています。教職員皆様の9か月におよぶ努力の結果、3月14日から3日間の審査を無事パスして4月8日に認証されました。関係者皆様に感謝申し上げます。しかし、この認証制度は、毎年新たな改善目標の設定とその成果について外部審査を受けることが義務付けられております。皆様の1年後の成果を期待しております。

臓器系統別専門診療体制について

本院では中期目標の診療に関する目標として「患者本位の医療の促進」を掲げ、中期計画ではそのための措置として、「平成18年度までに臓器系統別専門診療体制を整備・充実させるとともに、待ち時間の短縮、診療時間の拡大等患者利便を図る。」こととしていました。

これを踏まえた年度計画を推進するため、16年10月にワーキンググループで検討し、その結果を11月の診療科長会議に報告したうえで、病院全体の体制を考慮しながら細部について検討を重ねた結果、4月から診療科名を次のように変更しました。

- 旧第一内科⇒消化器内科、血液内科、膠原病内科
- 旧第二内科⇒循環器内科、呼吸器内科、腎臓内科
- 旧第三内科⇒内分泌内科、糖尿病代謝内科、感染症科
- 旧第一外科⇒呼吸器外科、心臓血管外科
- 旧第二外科⇒消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科

また、神経内科の診療については、診察室の整備や病室の配置を終えて6月から開始しました。

今後、一層総合診療部及び救急部と連携して診療体制の充実に努め、患者サービスの向上を図ることとしています

臨床研修指定病院合同説明会開催

卒後臨床研修センター 加藤博之

本学附属病院を含む青森県内の臨床研修指定病院(11病院1病院群)による医学生に対する卒後臨床研修についての説明会が、平成17年5月14日14:30より弘前市のホテルニューキャッスルで開催された。昨年度から必修化された卒後臨床研修に対応すべく、本県では本年3月に県内のすべての臨床研修指定病院、県医師会、県などが参加して「青森県医師臨床研修対策協議会」を結成し、力を合わせてこの問題に対応することが決定されており、その事業の一環として本説明会が開催されるに至った。卒後臨床研修に対する医学生の関心は大変高く本学の5年次、6年次学生を中心に計69名の参加者があり、秋田大学、山形大学、岩手医科大学に在学中の本県出身者4名も参加した。会ではまず筆者が医師臨床研修対策協議会副会長として挨拶したあと、県医療業務課長佐川誠人氏より「青森県の保健医療と医

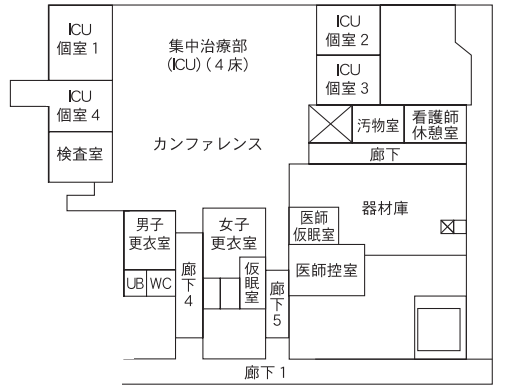


師臨床研修について」説明があり、その後各病院が設けたブースを医学生が自由に回って説明と質疑応答が行なわれた。さらにそのあと懇親会が行なわれたが、兼子直医学部長、三村申吾県知事も出席し、本県の卒後研修の魅力を大いにアピールし、盛会裏に終了した。なお今回の説明会に先立って4月23日には東京でも同形式の説明会を行い本件自身で他学に在学中の医学生を中心に約20名が参加した。県医師臨床研修対策協議会ではこのような説明会の開催を会の中心的事業と位置付けており、今後も力を入れてゆく方針である。

集中治療部の改修工事

集中治療部 坪 敏仁

5月25日に中央診療棟内にある集中治療部の改修工事が完了し、感染症などに対応できる個室2床を増やした8床体制での診療がスタートいたしました。昨年は満床のため、重症心疾患患者を八戸地区の病院に搬送せざるを得なかったこともありまして。こうした現状の打開にむけ、ICUに隣接する新人医師向けの研修施設を改修する形で、今年4月下旬に本格着工いたしました。工事は大型連休にあわせ、代替病床を設けるなど診療に影響が少ないように配慮し、ほぼ一ヶ月で完成にこぎつけました。多くの方々のお力添えなしには不可能だったと思っております。ICU増床で、病院からは増収による病院経営の改善を要求されていると思われま



集中治療室(ICU)平面図

と同様に極度な人員不足に陥っております。増収要求と業務の効率化の板ばさみはしばらく続くと思われま

看護の心をみんなのところに

看護週間は、今年15年目を迎えました。恒例となった玄関ホールへの生け花展示は、弘前公園の櫻を引き継ぐかたちで、啓翁櫻が咲きほころびました。

啓翁櫻は、北国に咲く櫻として改良されたものだそうです。花言葉は精神美。

まさに、看護の日を象徴するような櫻に、今年私達は巡りあうことができました。

多くの方々が、足を止め鑑賞して下さる姿を目にし、この行事に参加できた喜びを改めて感じました。

また、ナイチンゲールの誕生日5月12日には、メッセージカードにそれぞれ担当ナースが回復への祈りをこめたメッセージを添え入院患者様へお届け致しました。

感激し涙する患者様や、ご家族からお礼の言葉を頂いたり、枕元に飾られたメッセージカードを目の当た



りにして、多くのナースが患者様から勇気づけられたと思いを語っております。

この「看護の日」が国民ひとりひとり、安心して生活し、老い、生を全うできるような社会の実現を願って看護の心を大きく広げる機会になつてゆくことを祈ります。

(看護部)

院内コンサート開催 4月25日/春のうたコンサート

患者サービスの一環として実施している恒例の院内コンサートが平成17年度1回目として4月25日午後6時45分から附属病院外来待合ホールで開かれました。

今回は、東奥義塾教諭「熊木晟二先生」の【Bass】、東北女子短期大学講師「熊木美紀子先生」の【Piano】伴奏の両名をお迎えして『春のうたコンサート』と題して開催しました。

プログラムは、3部構成で第1部は『春のうた』、第2部は『なつかしのうた』、第3部は『イタリアのうた』などの独唱があり、30分の予定を多少オーバーし、会場を埋めた約100名の患者様たちの拍手によって院内コンサートが無事終了しました。熊木先生の張りのある【Bass】を堪能した48分間でした。



【編集後記】

「南塘だより」第38号をお届けいたします。お忙しい中御寄稿いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

記録的であった津軽の豪雪も消え去り、桜の満開と連休が重なりこれまた記録的な観光客を迎えた弘前桜祭りも終わりました。今、新緑の季節を迎えて、手術部廊下から見える弘前公園を白からピンクそして深緑に塗り替えている力は何なんだろうと考えさせられる今日この頃です。

JRの列車脱線事故のショックは

時間が経過しても脳裏から離れません。亡くなられた方々の御冥福を心よりお祈り申し上げます。「安全」と「信頼」は私たちにも強く突きつけられた命題であることを今更ながら思い知らされます。

各部署とも新人を迎え活気に満ちた新年度をスタートされたことと思います。情熱と笑顔をもった新人こそ病院の大きな宝です。彼らを大切に育てつつ、彼らの笑顔から勇気と情熱を吸収して世の中の変化を楽しみながら乗り切っていこうではありませんか。

(病院広報委員 坂井 哲博)